

# 「橋」の記憶と「夢の浮橋」

末 沢 明 子

1

『源氏物語』最終巻、夢浮橋巻には和歌が一首しかない。前巻、手習巻で多くの和歌を詠んだ浮舟は沈黙する。その意味を含め、宇治の物語と和歌との距離には考えるべきものがあり、既に種々の論がある。ここで問題にしたのは巻名「夢の浮橋」である。「夢の浮橋」は歌ことばであつたといえるだろうか。巻中に、また『源氏』以前に「夢の浮橋」なる語はなく、松風巻で古注の指摘する古歌「世の中は夢のわたりの浮橋かうち渡りつつものをこそ思へ」が、夢浮橋巻でも踏まえられているのか、「夢の浮橋」の語義そのものについても議論のあるところであつた。巻中、「夢」の語が数回使われており、「浮橋」に意味はなく、「夢」にこそ意があるとした古注の説は現在ではあまり受け入れられていない。「橋」「浮橋」に歌ことば的なものを認めるか否か。歌ことばは和歌史上の記憶の上に成立つ。最近「夢の浮橋」の語義が問われることもないが、物語最終巻の巻名が和歌的言語によって表わされたのだとすれば、この物語と和歌との関係について改めて考える余地があるだろう。

今更いうまでもないことながら、「夢の浮橋」との語が和歌に詠まれるのは「春の世の夢の浮橋途絶えして峰に分かるる横雲の空」と詠んだ定家以降である。また、定家以前、『浜松中納言物語』と『狭衣物語』に既にこの語

が使われていることも知られている。いずれも引歌のように使われており、夢浮橋巻に拠るに違いないが、今「夢の浮橋」という語を考えるに当たり、『源氏』後の用例は対象としない。後のものによって前のものを逆照射することは可能であるが、語義が問題となる「夢の浮橋」のような場合、逆に判断を誤ることもないとはいえないからである。

「夢」「浮橋」を素材とする和歌は『源氏』と同時代にある。『実方集』には

宇治にて、水に浮きたるはしに、うたゝねに寝たるに、よぶかき月にこゑをかしくて

うぢがわのなみの枕に夢さめて

よるはしひめやいもねざるらむ<sup>①</sup>

という短連歌がある。「水に浮きたるはし」が舟を並べた上に板を渡した橋であるとする、「うたゝね」の場としては落着かぬように思えるし、宇治の物語の内容とは重なることもなさそうな歌であるが、夢を詠込み、しかも宇治の浮橋を舞台とする歌であることに注意しておきたい。宇治川、宇治橋には「憂し」との掛詞、網代、氷魚などの景物、長く続く、続かないなどの心象が和歌と共に積重ねられて来た。「宇治橋」には恋の「中絶え」のイメージがあると指摘されている。<sup>②</sup>右の短連歌は「はしひめ」の一語により、宇治にまつわる心象が確かに含まれているが、その趣は重くはないと思われる。そうであるなら、作者の造語かともされる「夢の浮橋」を歌ことばとするにはもう少し考えてみる必要があるのではないか。

夢浮橋巻は宇治ではなく、小野―山里をその場とするから、浮橋の和歌としては定家の「春の夜の」の方が同巻と重ねるに適切であるようにもみえるが、川や橋をめぐる和歌を通して「夢の浮橋」の意味を考えてみたい。『源氏』の橋の和歌が「夢の浮橋」に関係するのではないか、との見通しに立つものである。

二つの地を隔てる川と隔てられたものを結ぶ橋、これらをめぐると和歌を考えるものとして歌枕がある。今、試みに現存『五大集歌枕』によつて数えてみると、「河」八四箇所、「河原」一三箇所があげられている。<sup>③</sup>これに對し、川に架けられる「橋」は一三箇所を数えるのみである。「不載之」とする「宇治橋」を加え、舟を渡す「渡」九箇所を加えても「河」の数には及ばない。

個々の川、橋にそれぞれ時代を超えて共有される心象や伝承があるならば、それらを記憶と呼ぶことができるが、川と橋の記憶は同じではない。文学の中で扱われたものとして考えるとき、両者の性格がかなり異なるであろうこと、さまざまな例から容易に見当がつく。種々論があるように、橋は境界であり、出会いの場であり、また此岸と彼岸を結ぶものでもあるが、橋をめぐるとそれらの記憶は歌枕とは異なるところから発生している。川は名所歌枕となつて歌ことばを呼び、和歌を呼んだ。

だが、実際に川を渡るとなると、特に橋のない渡しでは困難もあつたはずだし、和歌的なものとは異なる捉え方がされている。その点をまず考えたい。『蜻蛉日記』には川を渡る記事が二箇所ある。論じられている問題は多いが、今は和歌的発想という問題に限定して考える。上巻、安和元年の初瀬詣での記事では宇治川、泉川を渡るに際し、次のようにある。

・車さしまはして、幕など引きて、後なる人ばかりをおろして、川にむかへて、簾まきあげて見れば、網代もさしわたしたり。行きかふ舟どもあまた、見ざりしことなれば、すべてあはれにをかし。……破籠などものして、舟に車かき据ゑて、行きもて行けば、贅野の池、泉川などいひつゝ、鳥どもゑなどしたるも、心にしみてあはれにをかしうおぼゆ。かいしのびやかなれば、よろづにつけて涙もろくおぼゆ。(八八)<sup>④</sup>

宇治の景物である網代が出てくるが、それは知識にあつたとしても、同時に「見ざりしことなれば」とする捉え方であり、歌枕的発想によらずに川を見、初めて見る光景に新鮮さを覚えたことを示す。「舟に車をかき据ゑて」も川を渡る場合に起こる具体的なことを記している。車に乗せたことを書きとめたのは、やはりそれが新鮮な体験であつたからであろうが、川を渡るのが容易なことではなかつたことが前提としてある。帰途に宇治川を通る際には迎えに来た対岸の兼家との間で網代、氷魚という宇治の景物を詠込んだ贈答歌が交わされ、前半とは色調に違いがあるが、中巻、天禄二年の初瀬詣での記事にも

・くらくなりぬれば鶺舟どもかゞりびさしともしつゝ、ひと川さわぎたり。をかしく見ゆることかぎりなし。頭のいたさもまぎれぬれば、端の簾まきあげて見出だして（一一六一）

・さる用意したりければ、鶺飼かずをつくしてひと川うきてさわぐ。……うつしどもなど、まだ見ざりつることなれば、いとをかしう見ゆ。来こうじたる心ちなれど、夜のふくるもしらで見入りてあれば（一一六四）

などと鶺舟を見ての感興が記される。「うつし」は解釈が定まっていないが、鶺飼に関連する。こゝでも「まだ見ざりつることなれば」と述べ、頭痛も疲れも忘れて見入るのは歌枕的興味とは異なる。安和元年に長谷寺で乞児の姿を捉えたのも和歌的ではないが、歌枕となることの多い川を渡るとき、川を実際に見て、和歌の題材とならないことを記すことに注意したのである。『蜻蛉日記』では「見慣れた洛中の自然景物」は「引歌表現、歌言葉という言葉じたい」、「日常生活圏を超えた空間に踏み出した洛外への物詣での記」では「作者自身の経験にもとづく情理」により文脈が展開していることが指摘される<sup>5)</sup>。経験が捉えたものによつて記事が展開してゆくときに採り上げられるのが実際に川を渡る時の困難、大がかりであることである。

中巻、初瀬詣でに先立つ石山詣では誰にも知らせず突然徒歩で出かける異常さが指摘され、記事中の「川原には死人もふせりと見聞けど、おそろしくもあらず（一一二〇）」もその点に関連して捉えられている。「ありふれた光

景」であることも一因として指摘されているが、これは和歌が選ぶことのなかった素材に目を留めたもので、実際に川を渡り、川原を通る時にあり得たことであつた。

川を渡ることが一大事であることは『更級日記』にも見られる。上洛の記では、太井川を渡る際に「夜ひとよ、舟にてかつぐ物などわたす(三七三)」「つとめて、舟に車かきすゑてわたして、あなたの岸に車ひきたてておくりに来つる人くこれよりみななかへりぬ(三七四)」とあることから窺える。上総守一行の帰京が大がかりなのは当然といえるが、初瀬詣での記事にも川を渡ることのある種の困難さが見える。宇治の渡りでは、

そこにも、猶しもこなたさまにわたりする物ども立こみたれば、舟の楫とりたるをのこども、舟をまつ人の数もしらぬに心おごりしたるけしきにて、袖をかいまくりて、顔にあてて、さをにおしかりて、とみに舟も寄せず、うそぶいて見まはし、いといみじうすみたるさま也。(四一九)

という困難が待っている。大嘗会御禊の日に大方の流れに逆らつて京を出、宇治川も逆に渡ることは余計な困難を齎したかもしれない。舟が出るのを待つ間に、『源氏物語』を思い浮かべて興味を覚えているから、困難とするのは適当でないかもしれないが、川を渡ることの容易ならざることを書き留めたものとして注意される。楫取達の様子はこれも和歌的発想とは別のところにある。再度の初瀬詣では、「はじめにこよなくものたのもし(四二三)」とするなど「たのもし」きことが強調されるが、渡ることの困難が消えたのではない筈である。

川は歌枕として多くの和歌が詠み重ねられた一方、渡ることに関しては、和歌的なもの、王朝貴族的なものとは別のものが捉えられた。時代を下つたところで、例えば、過剰ともいえるほど古歌、古典を引用する『うたたね』で引用のない箇所は、夜半、仕える御所を出奔、雨中、道を失つた阿仏を目指す寺へ案内した桂の里人の言動と、洲俣で長良川を渡るときの描写である。後者には

往来の人集りて、舟を休めずさしかへる程、いと所狭うかしがましく、恐ろしきまでののしりあひたり。から

くしてさるべき人皆渡り果てぬれど、人々も輿や馬やと待出づる程、河の端に下りゐて、つくぐと来しかたを見れば、あさましげなる賤の男ども、むつかしげなる物どもを、舟に取り入れなどする程、何事にかゆ、しく争ひて、あるひは水に倒れ入りなどするにも、見慣れずもの恐ろしきに（一七二）

とある。これも和歌的発想とは異なる捉え方であり、語彙も異なる。『蜻蛉』の川の記事に比べて、輿を乗せること、人々の様子はより具体的であり、「恐ろし」という語が重ねられる。それも「見慣れ」ぬことによる。

川を渡ることに伴う困難その他は説話を生むことにもなる。和歌を多く採入れた『西行物語』には、天中の渡り―天竜川の渡し場で、人が多く沈みそうになった舟の中、下船させようと、乗っていた武士が西行を鞭で血の出るほど打つ事件が書かれている。そこでは、泣き悲しむ「供なりける入道」を西行が仏の慈悲を説いて諭すのであるが、沈みそうな舟、その中で争いは和歌の題材とはならなかった。『西行物語』のこの場には『法華経』等の引用があるが、和歌はない。和歌がないこと自体、この説話が後代のものであることを思わせるが、西行の問題としてではなく、川の問題としてこの説話を考えると、渡ることの困難が見えるものである。

説話を生むという点で、川を渡ることが橋と似た面があるかもしれない。川に比べて歌枕となることの少なかつた橋は、詠まれた歌の背後に説話があることが少なくない。和歌を多く生む橋は多くはない。八代集他、平安時代の和歌を見渡したとき、久米路の橋、長柄の橋が例としてあげられる。いずれも説話を伴う。

久米路の橋は、一言主神の故事を踏まえるが、和歌では恋の途絶え、中絶えの喩えとして詠む。説話を記憶しながらも歌ことばを重ねてゆくものといえる。

長柄の橋も和歌の多く詠まれた橋で、八代集に二十一首の他、私家集にも数首見える。「あふことを長柄の橋のながらへて恋わたるまに年ぞ経にける（古今集・恋五、坂上是則）のように「ながら」という音を響かせ、「ながらへて」とするものもあるが、橋が朽ちたか朽ちないかを詠む歌の方が多い。屏風歌題材にもなり、古今集仮名序

の解釈をめぐる二条家と京極・冷泉家が対立など橋自体が和歌の関心事となっている。和歌の外にも広がり、民間伝承と結び付いたり、廃曲となった能「長柄」を生む例として注意すべき<sup>⑦</sup>という。和歌の世界で展開すると同時に説話を生む橋といえよう。

次に、三河国の八橋は業平の「からころもきつつなれにし」の直接的影響は意外に少ないとされる<sup>⑧</sup>。八橋の和歌を辿れば確かにそうなのだが、散文作品には、東海道を通る者が「橋のかたもなく、何の見所もなし」と言い切った菅原孝標女も含め、一言せずにはいられないことがみえる。杜若に言及することも多い。「蜘蛛手に思ふ」などのことばを呼び出す歌ことばとしての「八橋」があると同時に、中世の日記・紀行に見るように、業平の故事を念頭に、まさにその場にあつて詠まれることが同時にある。業平伝説は和歌だけでなく、能や絵画にも広がり、八橋についていえば、杜若がその題材となった。業平をめぐる八橋の記憶は強固なものとして種々の作品に現われている。

これらの橋は、その場を流れる川については和歌の題材となつてはいない。久米路の橋はそもそも川に架けられた橋ではなかったし、長柄の橋も橋だけが和歌に詠まれた。八橋も「蜘蛛手」であるのは水の流れであつた筈だが、和歌としては橋だけが詠まれている。

一方、宇治は、宇治という地にまつわる景物と心象を持つて川も和歌に詠まれたが、橋はやはり川とは異なっている。『五代集歌枕』が「不載之」とした宇治橋には橋姫説話がある。「さむしろに衣かたしき今宵もや我を待つらん宇治の橋姫」(『古今集』・恋四、よみ人しらず)については、「家刀自を思ふ」に分類する『古今和歌六帖』により、「宇治の橋姫」は「内の愛し姫」であるとする竹岡正夫氏の説もあるが、宇治との地名は背後に説話があることを思わせる。『奥儀抄』以下の歌学書・注釈書には橋姫のもとへ通う神をめぐる説話、一人の男と二人の妻をめぐる「橋姫物語」を伝える。片桐洋一氏は、宇治十帖の頃から一般的であつた、この歌を宇治と結びつける享受

の一方で、「内の愛し姫」と解する後者の説も続いていたのだとした。<sup>(10)</sup> この歌が本来的にどのようなものであったか今は不明としたいが、説話呼び起す歌であるといえよう。そして、橋をめぐる説話はむしろ和歌以外で展開している。『平家物語』剣の巻や『曾我物語』卷十一に見えるように、嫉妬した女が宇治川に浸って鬼となり、それを「宇治橋姫」と呼ぶ例もある。

以上のような橋をめぐる和歌と説話を考えたとき、川を渡ることにはやはり、橋よりもかなり具体的、現実的なものであったことが同時に見えてくる。

### 3

それでは、『源氏物語』に於ける川と橋はどのようなものであろうか。

川を渡ることの困難が現われやすい初瀬詣では『源氏物語』には五例ある。玉鬘巻では霊験あらたかなることを願つての「徒歩より」の困難は語られるが、宇治川を渡ることへの言及はない。椎本巻冒頭では、匂宮が初瀬詣での中宿りとしたのは「川のをち」にあった右大臣夕霧の別業であったことが語られるが、川を渡ることに関しては言及されていない。宿木巻、薫が初めて浮舟を見たのは初瀬からの帰途、宇治橋を渡って来る姿であった。

・下人も数多く頼もしげなるけしきにて橋よりいま渡り来る見ゆ（五・四八七）。

舟ではなく、橋を渡っている。これより先、総角巻には「宇治橋のいとも古りて見えわたさるるなど、霧晴れゆけば、いとど荒ましき岸のわたりを（五・二八二）」、浮舟巻にも「宇治橋のはるばると見わたさるる（六・一四五）」とある。それぞれ、匂宮と中君、薫と浮舟の間で宇治橋を詠み込んだ贈答歌が交わされ、宇治橋が存在していたものと読める。ほぼ同時代に実方の浮橋の短連歌もあり、この時代の宇治橋の実態は不明である。宇治橋を渡るのが



浮舟一行だけであることは注意されるが、こゝは舟でなく、橋を渡ること、渡ることの困難がないことを確認しておきたい。困難が全くないわけではなく、宿木巻の続く場面には

・泉川の舟渡りも、まことに、今日は、いと恐ろしくこそありつれ。この二月には、水の少なかりしかばよかりしなりけり。(五・四九〇。<sup>12</sup>)

という浮舟女房のことばがあるが、背後に置かれている。初瀬詣での他の二例は手習巻、巻頭に初瀬よりの帰途発病した横川僧都母一行が登場するが、渡ること自体は問題となっていない。今一例は浮舟を亡き娘の代わりに得たと喜ぶ妹尼が願ほどきに行く例であるが、浮舟が同行せず、小野に残ったところで物語が展開するのであるから、渡ることはこゝでも問題とはならない。妹尼から初瀬詣でを勧められた浮舟が、母や乳母が度々参詣させたけれどもよいことはなかったと回想する場面でも同様である。

川に架けられた橋ではなく、殿舎と殿舎を繋ぐ「はし」に関しては、渡ることの困難、あやうさがある。桐壺更衣に対する他の女御・更衣たちによる

参上りたまふにも、あまりうちしきるをりをりは、打橋、渡殿のここかしこの道にあやしき態をしつつ（一・二一〇）

という迫害、頭中将の車を見ようとする夕顔の宿の女房についての惟光の報告、

打橋だつ物を道にてなむ通ひはべる、急ぎ来るものは、衣の裾を物にひきかけて、よろぼひ倒れて橋よりも落ちぬべければ、「いで、この葛城の神こそがかしうおきたれ」とむつかりて（一・一五〇）

などである。後者はあやうさともいえないが、一種の滑稽があり、和歌的ではない。宿木巻の女房の言う「恐ろし」も主人公ではなく、周辺にあり、これらはむしろ例外である。『源氏物語』に於いては渡ることの困難は見られない。橋は男女の「中絶え」や恋いの不安を象徴する歌語の歴史を受け継いでいるとされるが、総角、浮舟両巻の宇

治橋を含め、「はし」は何度か和歌に詠み込まれている。

- a 妹背山ふかき道をばたづねずてをだえの橋にふみまどひける（藤袴、三・三四一）
- b 雪ふかき山のかけ橋君ならでまたふみかよふあとを見ぬかな（椎本、五・二〇九）
- c つららとち駒ふみしだく山川をしるべしがてらまづやわたらむ（同）
- d 中絶えむものならなくに橋姫のかたしく袖や夜半にぬらさん（総角、五・二八四）
- e 絶えせじのわがたのみにや宇治橋のはるけき中を待ちわたるべき（同）
- f 宇治橋の長きちぎりは朽ちせじをあやぶむかたに心さわぐな（浮舟、六・一四五）
- g 絶え間のみ世にはあやふき宇治橋を朽ちせぬものとなほたのめとや（同、六・一四六）
- 紀伊の「妹背山」、陸奥の「緒絶橋」と二つの離れた地の歌枕を詠み込むaは、玉鬘を姉妹と知って恨み言を言う柏木の歌。aの本文は「まどひ」―「まよひ」の異同がある。現行注釈書は多く「まどひ」を採り、玉上琢弥氏『源氏物語評釈』は「まよひ」を採る。柏木と玉鬘の仲を表わす「妹背山」に対し、遠く離れた「緒絶橋」は「踏み―文」の掛詞をいうためには橋であることは必要だとしても、緒絶の橋である必然性はないようにみえる。柏木歌のいうところは「まどひ」である。仲が「絶え」ることではない点で、歌枕としての緒絶の橋の詠まれ方とも異なる。現代の諸注の中には「遠隔の地の歌枕二語の使用が、稀有な体験のとまどいを表象（『新編全集』頭注）」とするものもあるが、ここでは橋を詠んだ歌として注意しておきたい。川に架かった橋を実際に渡るのではなく、恋の迷い、惑いを表わすものとして詠まれている。

b・cは大君と薫の贈答歌。大君の歌bにある「山のかけ橋」は棧道であって川に架かる橋ではないが、答える薫の歌cには「山川」を「わた」とある。『新編全集』頭注も引く『細流抄』説の如く、「上句は艱難なる道をひたてたる」のであり、「川をわたるとは、人にあふ事をいへり」ということになる。

dに「橋」の語はないが、「橋姫」により宇治橋とわかる。「心より外ならむ夜離れ」を言う勾宮―中君（d・e）、薫―浮舟（f・g）の贈答歌は「絶え（d・e）」「はるけき（e）」、「長き（f）」「朽ち（f・g）」「絶え間（g）」とそれぞれ相似た語が用いられている。流出と再建が繰返されたらしい宇治橋にまつわる心象としての語である点で、歌枕といってよい。

「かけはし（橋）」をも加えた橋の歌はそれぞれ恋を表わし、それぞれ和歌的な語を用いている。以上のことを念頭におき、改めて夢浮橋巻唯一の和歌

h 法の師とたづぬる道をしるべにて思はぬ山にふみまどふかな（六・三九二）

を考えてみたい。横川僧都を仏法の師として山へ行ったのに、その道をしるべとして、思いがけずも恋の山に「ふみまどふ」という薫のこの歌はaに似ていないだろうか。「ふみまどふ」この歌は浮舟への文の中に書かれている。掛詞ととる必要はないだろうし、柏木と薫では状況が全く異なるが、ことばの類似性が注意されるのである。薫が柏木の子であることは今は問題としない。「橋」は詠み込まれていないが、「はし」には「かけはし」もあり、bのような歌もあった。

「ふみまよふ（ひ）」「ふみまどふ（ひ）」を含む歌を『新編国歌大観（CD-ROM版）』により検索すると、重出歌を除き五八首、二四首となる。この中にはa、hも含まれ、多くは『源氏』以後のものである。「ふみまよふ」「ふみまどふ」の用例の少ないことは既に『評釈』に指摘があるが、本文異同の問題として扱われているものである。<sup>14</sup>ここでは「橋」の和歌との関連で考えたい。右用例から『源氏』以前の恋歌を取り出せば、

- i 道しらぬものならなくにあしひきの山ふみまどふ人もありけり（朝忠集）
- j しらかしのゆきもたえにしあしひきの山ちをたれかふみまどふべき（朝忠集）
- k いくたびかふみまどふらむ三輪の山杉ある門は見ゆるものから『うつほ物語』藤原の君

がある。

i-jの贈答は、i第三句を「みよしのの」、j第二句を「ゆきかきこえて」として『敦忠集』にも収める。『朝忠集』詞書によれば朝忠から他の女に宛てた手紙が誤って大輔のもとに届き、大輔が「道しらぬ」を贈り、朝忠が「しらかしの」と返したというもの。『敦忠集』詞書もほぼ同様のことを伝える。この贈答歌は橋ではなく、山路を「ふみまどふ」もので、「踏み」「文」の掛詞を用いる。手紙の行き違いを題材としたもので、本当の意味での恋の迷い、惑いを詠んだものとはいえない。

橋も山もないkはあて宮求婚者の一人、平中納言の歌で、返事をしないあて宮に思いを訴えている。恋ゆえの惑いとはいえるが、この場合の「ふみまどふ」には、前後に「聞こえ初めては久しくなりぬれど、おぼつかなきは、いかなるにか」「度々ののは、いかなりけむ」とするようになり、「文」が「まどふ」、即ち、自分が「文」を何度か送ったのに何故返事がないのか、「文」はどこへ行ったのかということに意がある。i・jと同じく「踏み」「文」の掛詞が「ふみまどふ」という語を必要としたのだといえる。

恋に関わらぬものは「雪ふりて道ふみまどふ山里にいかにしてかは春のきつらん（平兼盛、『後拾遺和歌集』春上）」の一首のみである。詞書に「山寺にて正月に雪のふれるをよめる」とあり、「ふみまどふ」に特別な意味はない。

これらのことを考えるとaとhの類似はやはり注目される。hには川に架かる橋はないが、山があり、「かけはし」を連想することができる。薫は浮舟を求めて宇治ではなく、横川を訪ね、小野という山里に小君を遣わす。川に架かる橋ではない、山の「梯」を踏むのである。現実の「梯」ではなく、喩えとしての「梯」である。夢浮橋巻唯一の和歌と不安定さを思わせる「夢の浮橋」との語は意外に近いのではないか。後述するようにhと「夢の浮橋」を関連させる説は他にもあるが、本稿はaを介在させることを重視するものである。

それでは「夢の浮橋」は薫と浮舟の距離を表わし、橋を渡るのは薫なのであるか。しかし、これ以前、『源氏物語』の中では男女の間、特にその距離をを橋の語で表わすことは前節に引いた和歌を除いてはなかったのではな  
いか。八宮山荘も宇治川の手前、京側にあったし、現実の川に隔てられていた男女もいなかったのだから、当然で  
あるとはいえる。が、宇治十帖では男女間の距離が前面に出ている。男女の物理的、心的距離は「隔て」という語  
やモノに表わされた。大君、中君にも「隔て」が繰返される。御簾や几帳は男女を隔てるものであり、また、それ  
を夾んで男女を向き合わせるものであった。<sup>(15)</sup> そのような意味での「隔て」は浮舟にとり、薫との間にも匂宮との間  
にも存在しない。が、浮舟の周囲には別の「隔て」があり、「隔て」の問題は改めて問われる。

手習巻、小野僧庵で来し方を回想する浮舟が母、乳母に次いで折々思い出すのは「よろづ隔つることなく語らひ  
見馴れたりし右近(六・三〇三)」であった。浮舟にとっては「隔て」は男女間のものとは別のものである。横川  
僧都妹尼の婿であった中将が小野を訪ね、浮舟に関心を示す。その折の妹尼と浮舟のやりとりにも「隔て」の語が  
ある。

・心憂く、ものをのみ思し隔てるなむいとつらき。今は、なほ、さるべきなめりと思しなして、はればれしくも  
てなしたまへ。(六・三〇九)

・隔てきこゆる心にもはべらねど、あやしくて生き返りけるほどに、よろづのこと夢のようにたどられて(六・  
三二〇)

素性を明かさぬ浮舟の態度は妹尼には「隔て」と受け取られ、妹尼も中将から「隔て」といわれると言われる。出家し  
てしまった浮舟に対する「行く末の御後見」と言う中将は、浮舟を探す人はいないのかと尋ね、

さやうのことおぼつかなきになん、憚るべきことにははべらねど、なほ隔てある心地しはべるべき。(六・三五三)

と言う。浮舟の周囲には「隔て」が張り巡らされている。自身の一周忌法要のための小桂を見た浮舟が例の「あまころも」の和歌を書いた後、素性が知れた時のことを思い、過ぎ去ったことはみな忘れたと言うのに対し、妹尼がさりとも、思し出づることは多からんを、尽きせず隔てたまふこと心憂けれ。(六・三六一)

と言ひ、重ねて行方知れずの浮舟を心配している人があるうにと言う。対して、母とは言わぬものの、浮舟が一人の人のことを

なかなか思ひ出づるにつけて、うたてはべればこそ、え聞こえ出でね。隔ては何ごとにか残しはべらむ。(六・三六一)

と「言少なに」答える。右近との例を除き、これらの「隔て」は妹尼に対して言われたものをも含め、どれも素性を明かさぬことをいつている。物理的「隔て」はなく、人物相互の心的なものであり、浮舟は「隔て」を責められる。それらは多く「心憂し」という語を伴う。夢浮橋巻に至っても、「隔て」の語は続く。横川僧都の手紙により、薫との仲を知られた浮舟が顔を赤らめ、「もの隠ししけると恨みられんを思ひつづくるに、答へん方なくて(六・三八五)」いると、妹尼は「こゝでも

「なほのたまはせよ。心憂く思し隔つること」と、いみじく恨みて(同)と言つて落ち着かずにいる。続いて、僧都の手紙を持った小君が到着すると

この君は、誰にかおはすらん。なほ、いと心憂し。今さへ、かく、あながちに隔てさせたまふ。(六・三八七)と「責め」る。「隔て」の語は浮舟により、小君により繰返される。

げに隔てありと思しなすらむが苦しさに、ものも言はれでなん。(六・三八八)

・思し隔てて、おほおほしくもてなさせたまふには、何ごとをか聞こえはべらむ。(六・三九一)

浮舟は「隔て」と思われたくないと言い、小君は「隔て」があつては何も言えないと訴える。浮舟は「隔て」を保つことで過去を絶とうとするが、それも殆どかなわぬほどのあやうい「隔て」であつた。そのような「隔て」の末に浮舟の前に出されたのが薫の「法の師と」の和歌である。

薫の「法の師と」の和歌は先にみたように、山の梯を踏み迷うような趣の歌である。「隔て」を保ち得なくなつた浮舟に近付こうとする薫は「思はぬ道を踏み惑」つている。「夢の浮橋」が二人の間に架けられたものであるとしても、それは「うち渡りつゝものをこそ思」うようなものではないのではないか。浮舟は山里小野にいるが、宇治を物語を代表する地として、「浮橋」は川に架けられたものとしてよいだろう。薫は惑いつゝ橋を渡っているのである。松風巻の源氏が堰の明石君のもとへ行けたように薫は小野の浮舟のもとへ行けるのか。二巻の「浮橋」は同じではない。松風巻では不安定ながらも隔てを超えることができた。夢浮橋巻の「浮橋」は一層あやうい。

以下、先行の夢浮橋論、橋論を振り返りながら「夢の浮橋」の意味、夢浮橋巻の和歌の問題について見渡したい。「夢」にのみ意味を認めた『河海抄』説から、現在では「浮橋」の意味を問うことへと変わっている。宇治十帖論の前提として、「橋姫」「宇治橋」などが『源氏物語』の時代に恋の「中絶え」を表わしていたことは、大方に受け入れられていよう。「宇治橋」が名所歌枕であつたかはともかく、和歌によって積み重ねられた心象があつたと認められる。「中絶え」を述べた高橋亨、廣川勝美両氏の説を受けた今井源衛氏「宇治橋」の贈答歌について」は、「橋」のイメージが後撰集時代から不安の色を濃くしてきたとし、「夢浮橋」は男女の仲を危険な橋にたとえた古歌「夢のわたりの浮橋か」により、男女の道の「とだえ」を暗示するものとした。不安定な、更には「中絶え」する男女の仲とするのが一つの流れである。<sup>16</sup>やはり男女の間にある「浮橋」としながらも、益田勝実氏説は、「夢の浮橋」は記紀に見える「天の浮橋」であり、「夢の中での、もしくは夢のようであつたところの、二人の交情の永

遠の喪失の嘆き」が託されたもので、「浮舟を失った薫の側に立って」の命名とし、「橋」を川に架けられた橋としない。

夢浮橋巻は何を語ろうとしたのか。救済の問題がその一つであることは否定できない。「橋」が仏教的濟度のたとえとされたことを踏まえ、「夢の浮橋」は横川僧都が一人の間に架け、薫を此岸から彼岸へ渡そうとした「橋」がきわめて不安定なものであることを象徴するとしたのは鷲山茂雄氏説<sup>18</sup>である。同説は薫の「法の師の」の歌からすると、僧都の渡した橋も「あやうく、漂うがごときであり、それ故にまた『憂き』もの」でもあり、卷名異名である「法の師」も「夢の浮橋」に近いとする。「夢の浮橋」を救済の問題と結び付ける諸説は、それぞれ同じではないが、もう一つの流れとしてある。<sup>19</sup>

高橋亨氏「光と闇の変相―源氏物語の世界」<sup>20</sup>は、「夢」が魂の通路たりえなくなり、幻巻のような歌ことばの物語的機能も停止したのが夢浮橋巻で、「夢という浮橋が、もはや男と女を架橋しえぬものだということはいえる」、  
「歌ことばらしくみせかけてへ作者」がしくんだアイロニーであるのかもしれない」とした。架橋の不可能性と共に和歌の問題を論じたものであった。架橋の不可能性という点では葛綿正一氏「階と橋」<sup>21</sup>も『源氏物語』全体を見渡した上で、「階は人と人を垂直の構図に位置づけ、葛藤を可視化してくれるものであり、橋は人と人を水平に結びつけるかにみえて、実は人を宙に迷わせてしまうものであった」とし、「法の師」の歌にも言及した。架橋不可能に思える夢の浮橋であるかもしれないが、なおも薫と浮舟の間に架橋しようとする横川僧都をみようとする沢田正子氏説もある。<sup>22</sup>

「夢の浮橋」が薫と浮舟を近付けるものであるよりは両者の距離を示していることは、「夢」の「浮橋」である以上、当然かもしれないが、各説とも共通していよう。此岸と彼岸を結ぶのが「橋」であるとしても、「人の隠し据ゑたるにやあらん（六・三九五）」と疑う薫は彼岸からは遙かに遠い。出家したものの、浮舟も彼岸に近いとは



いえない。両者の距離の何に着目するかによって「夢の浮橋」の解釈も異なってくる。本稿の立場は、「ふみまどひ」とある和歌から、惑いつ、薫が渡ろうとしていることを捉えようとするものである。浮舟は「隔て」を置こうとし、そこへ「夢」をみているような思いを抱いて薫がやって来ようとしている。僧都の手紙を還俗非勸奨と解するとしても、薫の庇護下で出家生活を続けることは浮舟の願うところではないだろう。浮舟が手紙をそのように理解したかどうか不明である。「隔て」は殆どなくなろうとしているが、代わって「橋」が置かれ、両者間におお距離があることが示される。その「橋」もあやうい「夢の浮橋」である。浮舟は登場のはじめに「橋」を渡って薫に近付いて来たが、今度は逆である。二つの「橋」の性格は異なっている。

「夢の浮橋」は歌ことばであったか。「橋」はそもそも説話を生みやすいものであったが、『源氏物語』は川を渡る実際の困難には殆ど触れず、その意味で和歌的な捉え方をしているようにみえる。しかし、物語の最後に置かれた「橋」は渡ることの困難なものであった。「夢の浮橋」が歌ことばでないと断言するわけではない。今、「夢の浮橋」に和歌的なものをみるのは和歌史と共にある記憶の故ではなく、「法の師と」の和歌が「夢の浮橋」と密接な関わりがありそうであり、類似する特徴的な表現の橋の和歌が既に藤袴巻にあると考えるためである。記憶は物語内の和歌にある。物語最終巻唯一の和歌が巻名の意味を解く手掛かりを与えるのであれば、物語の行き着いた地点でも和歌がなお機能していたといい得るのではないだろうか。

注

(1) 和歌の引用は『新編国歌大観』により、私に表記を改めた。

(2) 高橋亨氏「宇治物語時空論」『源氏物語の対位法』（東京大学出版会、一九八二。初出一九七四）、廣川勝美氏「源氏物語・宇治時空論―その基層と表層―」（『日本文学』一九七五・一一）に始まる。高橋論文では、『実方集』の短連歌を「いわば教養主義的

な機智に遊んだ」とする。

- (3) 『日本歌学大系 別巻一』による。
- (4) 新日本古典文学大系本の頁数。以下、日記文学作品はすべて同大系本による。なお、一部表記を改めた。
- (5) 鈴木日出男氏『蜻蛉日記』物詣での自然（木村正中氏編『論集 日記文学―日記文学の方法と展開』、笠間書院、一九九二）。
- (6) 注5に同じ。
- (7) 片桐洋一氏『歌枕歌ことば辞典 増訂版』（笠間書院、一九九九）。
- (8) 注7に同じ。
- (9) 『古今和歌集全評釈 下』、右文書院、一九七六。
- (10) 『古今和歌集全評釈 中』、講談社、一九九八。
- (11) 安藤徹氏「橋・峠・川・水―空間を繋ぐ―」（物語研究会編『物語とメディア 新物語研究1』、有精堂、一九九三）、吉海直人氏「宇治橋の史的考察―『源氏物語』背景論として―」（伊井春樹・高橋文二・廣川勝美氏編『源氏物語と古代世界』、新典社、一九九七）など。なお、後者は、現実的な橋が機能している間は文学化されず、『古今集』以来、歌枕として確立していたか疑問視せざるを得ないとする。
- (12) 新編日本古典文学全集の巻数・頁数。
- (13) 「漢籍・史書・仏典引用一覽」（今井源衛氏執筆、新編日本古典文学全集『源氏物語五』、一九九七）。総角巻の宇治橋に関連して述べられ、『万葉集』のところまでは恋人のもとへ通う通路と見るものが多いが、平安時代には、『古今集』のところから、男女の「中絶え」や恋の不安を象徴する場合が多くなるとする。「橋」のイメージの変遷と『源氏物語』の書こうとしたものについては、後述するように、今井氏「『宇治橋』の贈答歌について」（『紫林照徑 源氏物語の新研究』、角川書店、一九七九。初出一九七八）などもある。
- (14) 大島本ではaに「まよひ」とあり、対する玉鬘の返歌が「まどひ」とあることから「ふみまどひ」とありたいとする。但し、答歌は影印版『大島本源氏物語』（角川書店、一九九六）・伊井春樹氏編『CD-ROM 角川古典大観 源氏物語』（角川書店、一九九九）並びに「大島本『源氏物語』（飛鳥井雅康等筆）本文の様態」（新日本古典文学大系『源氏物語三』、『源氏物語大成 校異編』によれば「まよひける」の「よ」を消し、朱で「と」と傍書したもので、大島本の最初の本文では贈歌、答歌とも「まよひ

で対応していたことになる。

- (15) 末沢「源氏物語に於ける飾りと隔て」(『物語とメディア 新物語研究1』)でも述べた。
- (16) 森朝男氏「夢の浮橋」『古代和歌と祝祭』(有精堂、一九八八。初出一九八四)、伊藤博氏「宇治橋の長き契り」『源氏物語の基底と創造』(武蔵野書院、一九九六。初出一九七四)など。
- (17) a「夢の浮橋」のイメージ」(『日本文学』、一九七八・二)、b「夢の浮橋再説」(『日本文学誌要』、一九八九・二)。近時、『源氏物語の鑑賞と基礎知識 夢浮橋』(野村精一氏編、二〇〇五・一一)に再録されたbでは日本の神話的発想に加え、宋玉「高唐賦」の内容も融合しているとす。
- (18) 「夢の浮橋」考」(『源氏物語主題論―宇治十帖の世界―』、塙書房、一九八五)。
- (19) 近年のものでは青井紀子氏「夢の浮橋を渡る人々―『白氏文集と』―」(中野幸一氏編『平安文学の変貌』、武蔵野書院、二〇〇三)。
- (20) 『源氏物語の対位法』所収、初出一九八〇。
- (21) 『源氏物語のテーマリズム 語りと主題』(笠間書院、一九九八。初出一九八六)。
- (22) 「横川僧都」(『源氏物語の鑑賞と基礎知識 夢の浮橋』)
- (23) 今西祐一郎氏「横川僧都」小論」(『論集日本語・日本文学 中古』角川書店、一九七七)、三角洋一氏「横川僧都小論」『源氏物語と天台浄土教』(若草書房、一九九六。初出一九九三)など。